

『暗夜行路』にみられる程度副詞の語彙と

その意味組織と各語の用法 (3)

——そのさまの程度を示すもの——

井 上 博 嗣

⑦ 「はなはだ」について 七例

(i) 形容詞を修飾する場合 四例

- 甚だ虫のいい事ですが、…… (八八頁上段一四)
- 仲間でも甚だ評判の悪い女である事がわかった。 (一二二頁下段一八)
- それでも自分は現在の栄花に対し同情が持てるかどうか甚だ心もとなかった。 (一一七頁下段二二)
- それは甚だ面白くない傾向だと (二三頁下段六)

右例で始めの二例の「甚だ」は「虫のいい・(評判の)悪い」を修飾し、それぞれの状態の程度が高度であることを意味している。後の二例の「甚だ」は「心もとなない・面白くない」を修飾している。「心もとなない・面白くない」はこの場合形容詞相当の状態的意味を示すものとしてある。「甚だ」はそれらの状態の程度が高度であることを意味するものとして用いられている。

(ii) 形容動詞を修飾する場合 三例

・前にどんな奴が使ったか知れない物だから、よくても或る意味では甚だ不潔だが、……。

(五八頁下段三)

・其他本郷の人達には甚だ不愉快な事であるのは勿論だが、

(八八頁上段三)

・「……ので、甚だ不躑とは思ひましたが、……」

(二五六頁上段一六)

右例で「甚だ」は「不潔な・不愉快な」と云う形容動詞と「不躑」と云う形容動詞語幹を修飾し、それぞれの状態の程度が高度であることを意味している。先の「面白くない」は「不愉快・不躑」と同様の状態性の意味のものと見えよう。

「はなはだ」は「甚だ」と表記され、以上の二つの場合にしか用いられていず、「至極」同様にヒト・モノ・コトの状態の程度が高度であることを意味する用法しかもたない。「至極」と違って会話文・手紙文にも用いられている。

(ix) 「恐しく」について 一例

(i) 形容動詞を修飾する場合 一例

・彼は恐しく惨めな気持に絶えず追ひつめられ

(二二九頁上段二六)

右例で「恐ろしく」は「惨めな」を修飾し、その状態の程度が「恐ろしいまで」の高度であることを意味している。

「云わゆる程度副詞とされるものは元々それとしてあった語ではない。他の品詞であった語が転用されてのも

のである。以上の(i)~(ix)の九語は形容詞連用形・語幹や形容動詞連用形・語幹であった語が転用されたものである。これら以外に今一群のものとして、指示副詞が程度副詞化したものがある。但し、その殆どはその指示副詞の意味において程度が高度であることを意味するにとどまっている。殊に近称を示す語において。

(x) 「かう」について 十五例

(i) 形容詞を修飾する場合 四例

・「お爺さーん」「芳子さあー」かう甲高い声と幅のある濁声とが呼び交はした。(八〇頁下段一〇)

・——今更にこんなことを書くまでもないが、どうして、かう弱いか自分でも齒がゆくなる。(九八頁下段二三)

右例で「かう」は各々の具体的な言語場で語手(書手)の近くにある領域内のモノ・ヒトの「声の甲高いさま・自分の弱いさま」を「かう」とさしあたって指示副詞として受けて指示している。その受けて指示する「さま」が「それ程に」状態の程度が高度であることを意味することから、「かう」が修飾する「甲高い・弱い」の程度が高度であることを示すに至っている。

次例も同類例である。

・「……」かう荒つばく云って、(二四八頁下段一〇)

・かう意地悪くなるのだらうと思った。(二一七頁下段一一)

(ii) 形容動詞を修飾する場合 三例

・然し、「世の中はこんなものだ」かう簡単に諦める事も出来なかった。(三五頁下段九)

右例で「かう」の受けて指示する「世の中はこんなものだ」なるさまは「簡単に」なる状態の程度が高度である。それを受けて指示する「かう」はそれが修飾する「簡単に」の状態の程度が高度であることを示すに至っている。

次例も同類例である。

・「意地悪！そんなら口で云へ。何だ」信行は故とかう乱暴に云った。(一六七頁上段二)

・かう天気続きで今度降り出すと又降り続きさうに思はれ、(二五九頁上段六)

(iii) 動詞を修飾する場合 三例

・「あああ。かう勝つちやあ、詰らんな」(四五頁下段五)

・それで返事がかう遅れるのだ、(二六四頁上段一〇)

・国府津、それから、大磯、藤沢、大船、かう段々近づくと、(一〇三頁下段八)

右例で「かう」は「勝つ・遅れる・段々近づく」を修飾している。「勝つ」は「勝った状態になる」、「遅れる」は「遅れた状態になる」、「段々近づく」は「段々近づいた状態になる」の意である。「かう」はそれらの作用をその具体的言語場でのさまとして受けて指示することでそれらの作用がもつ状態の程度が高度であることにおいてそれらの作用が実現することを「かう」は意味している。動作・作用の実現の仕方の程度を量るものとして改めて論じる。

(iv) 動詞+「ていく・てくる」を修飾する場合 三例

・然しかう傾いて行く考に総て人生の観方をゆだねる気は彼になかった。(三五頁下段二〇)

・富士山を是非見たいと思ふが、今日の天気で、どうだらう。かう曇つて来ては駄目かしら。

(六九頁下段二六)

・「……」。かうこじれて来ては此ままで眠るわけには行かないし。——」

(二一八頁下段二二)

右例で「かう」は「傾いて行く・曇つて来て・こじれて来て」を修飾している。「傾いて行く」は「傾いた状態になっていく」、「曇つて来て」は「曇った状態になってきて」、「こじれて来て」は「こじれた状態になってきて」の意味であることから(画)の場合と同類の意味として「かう」はある。

(v)副詞+(して)を修飾する場合 一例

・かう愚図々々、ほつて置く事が、

(二〇七頁上段二二)

右例で「かう」は「愚図々々」を修飾している。「愚図々々」は「愚図々々して」の意である。「かう」の意味は形容詞・形容動詞を修飾する場合と同様のものと言える。

残る一例は、

・「かうやつてゐれば……」

(二一九頁上段六)

であつて「かう」は「やつてゐれば」の賓語としてその内容を指示するにとどまっている。

「かう」は、現実の状態の程度が高度であることを結果として意味するものが八例、作用の実現の程度が高度であることを結果として意味するものが六例とはゞ中半する。

尚、一例だけであるが「かうも」の例がある。

・……といふだけでかうも変る自分が滑稽にも、亦、幸福にも感ぜられた。

(二三五頁下段二三)

右例で「かうも」は「変る」を修飾している。そして「変る」で示される具体的言語場での作用のありよう(変ったありさま)を受けてそれを指示することにより、作用がそのありようの程度が高度の程度において実現していることを意味している。「も」は「かう」を詠嘆することにおいて「かう」を強めていると言えようか。

(xi) 「これ程・これ程に・これ程にも・こんな・こんなに・こんなにも」について
ア「これ程」について 一例

形容動詞を修飾し、その状態の程度が高度であることを意味するものが一例である。

・心が只無闇と貧しくなった。——心の貧乏人——心で貧乏する——これ程惨めな事があらうかと彼は考へた。
(二二頁上段六)

右例で「これ程」は前文の事態を様相として受けて指示することにおいて、その意味性からして「惨めな」の程度が高度であることを示すに至っている。

イ「これ程に」について 一例

・それだけでなく、阪口をわざわざ連出して来て、自分の前でこれ程にやつつけることが……

(二三頁下段一七)

右例で「これ程に」は「やつつける」を修飾している。そして「やつつける」動作が「やつつけられた」状態が高度な程度において実現していることをその指示副詞の意味によって示している。

ウ「これ程にも」について 一例

・然しこれ程にも自分と会ふ事を重荷にして居るとすれば、

(三三頁上段二一)

右例で「これ程にも」は「重荷にして居る」を修飾している。「重荷にして居る」は心情のあり、よう、と云え、「これ程にも」はその指示副詞の意味によって「重荷にして居る」心情の状態の程度が高度であることを示すに至っている。「も」は「これ程に」を詠嘆することにおいてそれを強めている。

エ 「こんな」について 一例

• 「こんな強い^いのいやよ」

(四一頁下段六)

右例で「こんな」は「強い」を修飾し、具体的言語場での口にしたアルコール飲料のありようを受けて指示することにおいてその意味性から「強い」の状態の程度が高度であることを示すに至っている。

オ 「こんなに」について 七例

① 形容詞を修飾する場合 二例

• 「こんなに精しく^く書く必要はなかった。

(二九頁上段一七)

• 「こんなに遅く^くお願ひして——」

(一九六頁下段一五)

右例で「こんなに」は「精しく・遅く」を各々修飾している。そして、各々具体的言語場でのありようを受けて指示し、そう指示する意味性によって「精しく・遅く」の状態の程度が高度であることを意味するに至っている。

② 状態副詞を修飾する場合 一例

• 「こんなにはつきり^り石本に礼を云つた事など、……

(二五七頁下段一八)

右例で「こんなに」は「はつきり」を修飾している。その意味のありようは①の二例と同様である。

③ 動詞を修飾する場合 一例

● 珍らしくもなささうな事を何故こんなに騒ぐのかと思った。

(二四八頁上段一)

右例で「こんなに」は「騒ぐ」を修飾している。「こんなに」は「騒ぐ」で示される具体的言語場でのありようを受け指示することにおいて、「騒ぐ」と云う動作の実現がその動作のありようの程度が高度の程度でされていることを意味するに至っている。

④ 動詞＋「てきた」を修飾する場合 一例

● 「……こんなに御馳走を持って来て上げたのに……」

(二六六頁上段六)

右例で「こんなに」は「御馳走を」持って来て上げた」を修飾している。「こんなに」の意味のありようは③の場合と同様である。

⑤ 動詞＋「ている」を修飾する場合 一例

● 「――俺は何の為に、こんなにお前を責めてゐるか自分でも分らない。……」

(二一九頁上段八)

右例で「こんなに」は「責めてゐる」を修飾している。「責めている」は「責める」という心情作用の持続していることを意味する。心情作用の持続は心情のありようである。「こんなに」はそれが受けて指示する意味において「責めてゐる」ありさまの程度が高度であることを意味している。

カ、「こんなにも」について 二例

① 形容詞を修飾する場合 一例

● 淫蕩な精神の本体がこんなにも安っぽいものだと思ふ事は……

(六四頁上段一〇)

右例で「こんなにも」は「安つばい」を修飾している。「こんなにも」は「安つばい」で示される具体的言語場でのモノのありさまを受けてそれを指示することにおいて、「安つばい」と云う形容詞の状態の程度が高度であることを意味している。

②体言十格助詞「を」十動詞を修飾する場合 一例

・さういう女にこんなにも嫉妬を起こす自身を憐れむ風さへあつた。

(一八三頁下段一三)

右例で「こんなにも」は「嫉妬を起こす」を修飾している。「こんなにも」は「嫉妬を起こす」で示される具体的言語場での話手の心情作用のありようを受けて指示することによりその作用の実現がその作用のありようの程度が高度の程度においてなされていることを意味している。

この場合も状態の程度を高度と量る用例と作用の実現を高度と量る用例は一對一である。

「こんなにも」の「も」は「までも」の意味において「こんなにも」を強めている。

キ、「それ程に・それ程・そんなに、そんなにも」について

(i)「それ程に」について 十七例

①形容詞を修飾する場合 四例

・寧ろ書かれた場面が実際自分との間にあつた事ならば却つて怒りいい。然し性格だけを自分に取つたらうとは云ひにくかつた。それ程に下らない人物に書いてある。

(一三頁上段二二)

・寧ろさう決めなければ駄目だと考へた。それ程に珍らしく彼は自信が持てた。

(二五二頁上段七)

右例で「それ程に」はいずれも前文での内容を受けてその内容ほどにと指示し、その意味において「下らな

い・珍らしく」と云う形容詞の示す状態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である。

●愛子との事で受けた彼の傷手はそれ程に未だ、彼には生々しくかつた。

(二九頁下段二〇)

●もつと深い何かで惹きつけられ、彼の胸は波立つた。それはそれ程に其人が美しくかつたと云ふのとも異ふ。

(一三〇頁下八)

②形容動詞を修飾する場合 三例

●それ故、今度の場合でも父が不快を感じずる事は勿論予期してゐたが、それ程に怒り、それ程に命令的な態度を執ると云ふ事は考へてゐなかつたから

(九九頁下段三)

●信行の話し方はそれ程の経歴を持つた、そしてそれ程に悪辣な女だといふ所を：

(一一五頁下段四)

●謙作をそれ程に不愉快にした阪口の小説と云ふのは

(一〇頁下段一七)

右例で「それ程に」はいずれも前文での内容を受けてその内容ほどにと指示し、その意味において「命令的な・悪辣な・不愉快に」と云う形容動詞の示す状態の程度が高度であることを意味している。

③動詞+「ていた」を修飾する場合 二例

●それから日頃嫌ひな狩野探幽の雪景色を描いた墨絵の屏風もいいと思つた。それ程にさふいうものに餓ゑてゐたやうにも彼は感じた。

(八四頁下段八)

●母と祖父と、此結びつきが、何よりも堪へられなかつた。彼はそれ程に祖父を嫌つてゐた。

(一〇七頁上段二二)

右例で「それ程に」は「餓えてゐた・嫌つてゐた」を修飾している。「餓えてゐた・嫌つてゐた」はそれぞれヒトのありよう・心のありようを示している。「それ程に」はそれぞれ前文に記されている事態を受けてそれ程にと指示し、その意味において「餓えてゐた・嫌つてゐた」の状態の程度が高度であることを意味している。

④ 動詞＋「た」を修飾する場合 四例

● 彼は自分のした事を恥ぢ、……(中略)……。何が彼にさう云ふ事をさせたか、好奇心か、衝動か、好奇心なら何故それ程に恥ぢたか、…… (七七頁下段五)

● 父上は非常に怒られた。最初俺は何がそれ程に父上を怒らせたか解らなかつた程だ。 (九六頁上段三)

右例で「それ程に」は「恥ぢた・怒らせた」を修飾している。「恥ぢた・怒らせた」の「た」は過去も意味している。従つて「それ程に」は前文で示されている事態を受けて指示し、その意味において「恥ぢる・怒る」と云う心情作用の実現がその作用のありようの程度が高度の程度においてされていることを意味している。次例も同類例である。

● 自分の結婚をそれ程に喜んで呉れた事 (二六七頁下段一五)

● 僅か一二年の間に、何故、謙作がそれ程に變つたか (二三八頁下段一〇)

尚、「それ程にも」として次の一例がある。右四例と同類例である。

● 彼等の祖先がそれ程にも焦つた事すら知らず、 (五四頁上段八)

「も」は「までも」の意味において「それ程」を強めている。

⑤ 動詞＋体言＋形容詞「ない」を修飾する場合 一例

・「然しそれでもいいぢやあ、ありませんか。それより、身体が悪いやうなら医者に診て貰つて、それから直してかからなければ駄目ぢやありませんか。兎に角、こんな事はもつとよく考へてから決める方がよかつたんです」

お栄は今更の反対に当惑して居た。……(中略)……

謙作の方も最初はそれ程に云ふ気がなかつたが、

(一四七頁上段七)

右例で「それ程に」は「云ふ気がなかつた」を修飾している。「それ程に」は「」で示されている発言内容を受けて指示し、「云ふ気がなかつた」、心情の程度が「発言内容がもつ程度に」つまりは高度であることを意味している。どの程度「云ふ気があつた」と言えばその程度は非常な程度であることを示していることでもある。

⑥ 動詞＋「なかつた」を修飾する場合 二例

・彼は大森でその本を読み、其時はそれ程に感じなかつたが、

(二二二頁下段二二)

・離れて居るとそれ程に露はれなかつたかういう気持が、

(一四七頁上段二五)

右例で「それ程に」の「それ」はもはや明確に受けて指示するものをもたない。指示内容は臙化し、さし当たっては程度が高度であることを意味する語と化していると言えよう。それが「感じなかつた・露はれなかつた」を修飾すると「ない」との意味の関わりにおいて、「感じた・露はれた」と云う作用の実現がその作用のもつありやうの程度がかなりの低度においてされていることを意味している。

尚、次の例は⑤の類例とも言えるものである。

・何しろ、私は気持がクシャ／＼してかなはなかつた。其菓子がそれ程に食ひたいのではない。

「それ程に」は「食いたい」を直接修飾した上でその全体が「ではない」を修飾するに及んで、「食ひたい」心情の程度が低度であることを指示副詞の意味において示している。

「それ程に」は、以上のようにしてその大方は肯定文に用いられ、指示副詞の意味であることにおいてヒト・モノ・コトの状態の程度が高度であることを意味している。打ち消しの文に用いられている四例は、その多くがもはや指示副詞の意味を失い程度を高度と量る意味に転じつつ打消しの意味との関わりで状態の程度や動作作用の実現の程度が低度であることを示している。後者の用法は次の「それ程」に多い。

(ii) 「それ程」について 二十例

① 形容詞を修飾する場合 三例

・又それ程彼の頭にも危なつかしい所があつた。

(二二五頁上段二)

・それ程彼にとつて有難い母であるかどうか分らなかつた。

(三〇頁上段一五)

・「それ程悪い奴ではないかも知れないよ」

(五二頁下段二一)

右例で「それ程」は、前二例は前文の内容を受けてそれを指示し、その内容のありようの程度(高度)において「危なつかしい・有難い」と云う形容詞の状態の程度がそうあることを意味している。最後の一例の「それ程」は受けて指示するものがない。「それ程」は云わば漠然と高度の程度の意味を示すにとどまっている。その意味において修飾する「悪い」と云う形容詞の状態の程度が高度であることを意味している。

② 形容動詞を修飾する場合 二例

• これは謙作の寛大になりきれない気持が直子にさう思はせるので、謙作自身にとつては此意識は苦しかった。直子がつい犯した過失に対し、それ程 執拗に拘泥するのはつまらない、…… (二五一頁下段一六)

• 謙作にはこれまでのさう云ふ習慣から、それ程 貞節である良心もなかつたが、 (二八五頁上段六)

右例で、前例の「それ程」は前文の内容を受けて指示し、その指示内容がもつ状態の程度の高度さが「執拗に」なる形容動詞の状態の程度が高度であることを意味している。

後例の「それ程」はもはや受けて指示するものをもたない。指示は全く臙化し、状態の程度が高度であるとする意味のみを残している。その意味において「貞節(ある)」の状態の程度が高度であることを意味している。

③ 動詞+「ていた」を修飾する場合 一例

• 然し寺の上さんは謙作が直子の到着を切りに心待ちにしてゐる事を知つてゐたから、不意に会はし、若し気のゆるみから、どうかあつてはといふ心配で直ぐ会はず事に反対した。謙作はそれ程 衰弱してゐた。

(二六五頁下段二四)

右例で「それ程」が修飾する「衰弱してゐた」は体の状態を示している。「それ程」は前文の状態を受けて指示し、前文の事態がそのありさまの程度が高度であることからその程度(程)に「衰弱してゐた」状態の程度がある(つまりは高度である)ことを意味している。

④ 動詞を修飾する場合 一例

・赤児の声は段々に嘎れて来た。到頭仕舞ひに顔ばかりで泣いてゐて、声は出なくなつた。……(中略)……
赤児もそれ程苦みながら、乳だけは思ひの外、よく飲んだ。 (二〇〇頁上段三二)

右例で「それ程」が修飾する「苦む」は赤児の状態と云うより作用を示している。「それ程」は「それ」において前文の事態を受けて指示し、その指示する事態の様相の程度が高度である(それ程とすること)において、「苦む」と云う作用がそれがもつ状態の程度が高度の程度で実現していることを意味している。

⑤ 動詞＋「た」を修飾する場合 四例

・謙作は自分の留守中の事を直子が少しも云ひ出さないのを少し変に思つた。自分の一寸した不機嫌がそれ程直子にこたへたのかしら。 (二二五頁下段一四)

・彼は自分の心が、常になく落ちつき、和らぎ、澄み渡り、そして幸せに浸つて居る事を感じた。そして今、込み合つた電車の中でも、自分の動作が知らず／＼落ちつき、何かしら気高くなつて居た事に心附いた。彼は嬉しかった。其人を美しく思つたといふ事が、それで止まらず、自身の中に発展し、自分の心や動作に実際それ程作用したといふ事は、 (二三一頁下段八)

右例で「それ程」は「こたへた・作用した」をそれぞれ修飾している。「こたへた・作用した」が作用を示していることから又「それ程」が共に前文の事態を受けて指示し、指示内容を意味することにおいて、「それ程」の意味は二例ともに④の場合に変わりない。

次例も同類例に変わらない。

・何がそれ程父上を激怒させたか、

(九六頁下段四)

次例は「それ程」が受けて指示する事態をもたず、「それ程」は「深入りした」動作の実現のありようの程度が④の場合と同様であることのみを意味している。

●それはそれ程深入りした関係ではなく、
(二一九頁下段一)

⑥動詞十「ない・なかつた」を修飾する場合 四例

●そして此人は此儘、助からないのではないかと思つた。然し、不思議に、それは直子をそれ程、悲、し、ま、せ、な、か、つ、た。
(二六八頁上段一四)

右例で「それ程」は前文の事態を受けて指示し、指示する事態程との意味において「悲しませなかつた」を修飾している。「指示する事態程」は作用の実現が高度であることを意味するが「なかつた」に係っていくことにより「悲しませた」と云う作用の実現がその作用がもつ状態の程度が低度においてなされていることを意味している。

次例は「それ程」が受けて指示する事態をもたない。「それ程」は「思つた・気になつた」と云う作用・動作の実現が作用・動作がもつ状態の程度が低度においてなされていることのみを意味している。

●今までそれ程思はなかつた清賓亭のお加代の事が、
(四八頁下段六)

●彼にはそれ程気にならなかつたが
(二二頁上段一)

尚、一例「動詞十『ない』」を修飾する場合のものがある。

●男ではそれ程追つて来ない罪の報が女では何故何時までも執拗につきまといつて来るか。

(一一九頁下段五)

右例も又「それ程」は受けて指示する事態をもたず、「追つて来る」なる動作の実現が動作がもつありようの程度(時間量)が低度においてなされていることを意味している。

⑦その他の場合 五例

- 同時に彼の感情はそれ程燃えても居なかつた。(三一頁上段四)

右例の「それ程」も受けて指示する事態をもたない。「それ程」は「燃えて居る」という彼の感情の状態の程度が低度であることのみを意味している。

- 彼は自分は今はそれ程不気嫌でない事を示したかつた。(二二四頁上段一〇)

右例で「それ程」は受けて指示する事態をもたない。漠然と程度が高度であることを意味するのであるが「不気嫌でない」と「ない」まで係ることに於いて「不気嫌である」と云う状態の程度が低度であることを意味している。

次例も「それ程」が修飾する「歩きたくない」の「歩きたく」が形容詞・形容動詞相当の状態的意味であることから前例と同類例の意味用法にあるものと言える。

- 然しお栄は遠慮なのか、又実際それ程歩きたくないのか、(二六〇頁下段一八)

「それ程」が受けて指示する事態をもたない点も前例同様である。

- 中にはそれで家族を養つて行かねばならぬ者もあるが、さういふのはそれ程迷はないが、

(一一〇頁下段一〇)

右例の「それ程」も受けて指示する事態をもたない。「迷はない」と「ない」にまで係ることに於いて、「迷

う」と云う動作がその動作がもつありようの程度が低度においてなされていることを意味している。

●然し日が経つに従つて段々よくなつた。謙作の方も仙の事がそれ程 気にならなくなつた。

(二六三頁上段二〇)

右例の「それ程」も又受けて指示する事態をもたない。「気にならなくなつた」と「ない」にまで係ることにおいて「気になる」作用の実現がその作用がもつありようの程度が低度においてなされていることを意味している。

「それ程」は以上のように二十例を数え、「それ程に」の十七例より少し多い。二十例のうちヒト・モノ・コトの状態の程度が高度であることを示すもの六例、それらの動作作用の実現のありようが高度であることを示すもの五例、打消しの意味と関わり状態の程度や動作々用の実現のありようが低度であることを示すもの九例となる。「それ程に」はそれらが九例、四例、四例であり、一番目と三番目の用例数が対照的である。

尚、「それ程の」として次のような使用例もみられる。アは「非常な」と「随分の」にみられたものである。イは今迄の語にはみられなかつた用法である。

ア、修飾する体言のもつ状態の程度が高度であることを意味するもの 三例

● それ程の参り方

(二六三頁下段一三)

● それ程の間柄

(二五八頁下段二一)

● それ程の考えはなかつたのです

(六〇頁下段一九)

イ、連体修飾語句をもつ体言のその連体修飾語句の状態の程度が「ない」との関りから低度であることを意

味するもの

- 「それ程の馴染でもない家

(二六頁下段六)

「馴染である」程度が低度であることを「それ程の」は意味している。

アの第一例を除くと、「それ程」が受けて指示する事態をもたない。

(iii) 「そんなに」について 七例

- ① 形容詞を修飾する場合 ナシ

- ② 形容動詞を修飾する場合 四例

- 「まあ、待ち給へ、そんなに真剣なのかい」

(三六頁下段一四)

- 「然し何故会社がそんなにいやになつたのかしら？」

(一一〇頁下段三)

右例で「そんなに」はいずれも前者の発言内容(省略)を受けて指示し、その発言内容のありさまの程度が高度であることから「真剣な・いやに」と云う形容動詞の示す現実の事態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である。

- 「そんなに心配なら」

(二六一頁下段三)

- 「そんなに熱なのか」

(一七八頁上段二二)

- ② 動詞+「ている・た」を修飾する場合 二例

- 下の路から上さんが「来ました、来ました」とせか／＼石段を馳登つて来た。如何にも大事件らしいその

様子が可笑しかった。……(中略)……、今、四五十人の人がぞろ／＼河原を渡つて来るのを見、そんなに興奮してゐるのであつた。
(二四八頁上段五)

•現在の容態が、想像以上なので、すっかり驚いて了つた。そしてそんなに衰弱した謙作を見るのが恐しくもなつた。
(二六六頁上段七)

右例で「そんなに」は前文の事態を受けてそれと指示し、その事態のありさまの程度が高度であることから興奮してゐる・衰弱した」と云う状態の程度が高度であることを意味している。

尚一例、次のような例がある。

•「それぢやあ別の話を仕給へ」と緒方は眼をつぶつた儘、物憂さうに云つた。「面白い話なんて、そんなにないわ」と小稲は困つた顔をして黙つて了つた。
(三八頁上段一四)

右例で「そんなに」は前文の事態を受けて指示しているが、その指示している事態は「話がある」その多さ、(多くあるさま)であり、それが「ない」で打消されて「少ないさま(少数)」であることを意味している。

「そんなに」は七例中五例まで会話文で用いられている。会話語性の強い語である。一例を除き肯定文(句)にしか用いられないところもある。

「そんな」としての用例が四例みられる。

前文で示されるそのものありようを受けて指示し、そのありようの程度の高度からして修飾している形容詞の状態の程度が高度であることを意味するものに次の一例がある。

•駄目よ。お加代さん。そんな強いのを……」

(四一頁下段二〇)

形容動詞の状態の程度が高度であることを意味するものに次の二例がある。

●「そんな馬鹿な事はないでせう」

(二六〇頁下段一三)

●「そんな馬鹿な事があつて堪るものか」

(二六〇頁下段一五)

残る一例は体言のもつ状態の程度が高度であることを意味している。ありようを示し、そのありようはひどいものであることを意味している。

●「いや、いや。まだ、そんな容態とは私は思ひません。……」

(二六六頁下段一五)

四例ともに会話文に用いられている。そして前三例はモノ・コトの状態の程度が高度であることを意味し、最後の一例は体言の様相を示している。

「そんなにも」としての用例が二例ある。

●「少しは聴えたが、此方はそんなにも八釜しく思はなかつた」

(二四九頁上段二一)

右例で「そんなにも」は、さし当たっては「八釜しく」の程度が高度であることを意味するが、その全体が「思はなかつた」に係り「なかつ」と云う打消しの意味を修飾するに及んで、「八釜しく思つた」と云う作用の実現が作用のもつ状態の程度が低度においてなされていることを意味している。「そんなにも」の「も」が「までも」の意味で「ない」を修飾することにおいてである。

次例も同類例と言えようか。

●「そんなにも思はないが、……」

(二〇六頁上段二二)

「そんな」「そんなにも」は共に会話文においてのみ用いられている。

久、「あれ程に・あれ程・あれ程にも・あんなに・ああ」について

(i) 「あれ程に」について 四例

① 形容詞を修飾する場合 ナシ

② 形容動詞を修飾する場合 一例

・然し自分だけの問題に第三者のゐる前であれ程に露骨に云ふ彼とも思へなかつた。(一三頁下段一九)

右例で「あれ程に」は前文の事態を受けて指示する、そのありよう程にとの意味において形容動詞「露骨に」の状態の程度が高度であることを意味している。

③ 動詞又は動詞＋「てきた」を修飾する場合 二例

・全体これが、三日も前からあれ程に拘泥し、あれ程に力瘤を入れて来た事と何う云ふ関係があるのだからと云ふ気がした。(二七頁上段二一・二二)

「あれ程に」の「あれ」は前文の事態を受けて指示している。その事態が高度であることからそれ程とする「あれ程に」は「拘泥する・力瘤を入れて来た」と云う動作の実現がそれぞれの動作のもつ状態の程度が高度であることにおいてなされている・きていることを意味している。

③ 動詞＋「ずに」を修飾する場合 一例

・(手紙文)原因が分つてゐれば、あれ程に弱らずに済んだのです。(九三頁上段一四)

右例で「あれ程に」の「あれ」は前文での事態を受けて指示している。その事態が状態の程度が高度である意味をもつ為「あれ程に」はその高度の意味において「弱ら」を修飾するが「ず」に係るに及んで「弱る」と

云う作用の実現が低度においてなされていることを意味している。

(ii) 「あれ程」について 一例

・「……。お栄さんにも前の事、うかがって見たけど、貴方があれ程病的な事はないらしいんですもの。

……」

(二三三頁上段一六)

右例で「あれ程」は「あれ」が前文での事態を受けて指示している。その事態が高度の程度の状態である為「あれ程」は状態の程度が高度の意味をもつ。その意味において「病的な」と云う形容動詞の状態の程度が高度であることを示している。

(iii) 「あれ程にも」について 二例

・彼は前の自分を想ひ、全体何を目かけて、あれ程にも力瘤を入れ、あれ程にも一人先走りしたものか解らない気がした。
(二九頁下段八)

右例で「あれ程にも」の「あれ」は前文で述べられている事態を受けて指示し、その事態が高度の程度の状態である為「あれ程」は状態の程度が高度の意味をもつ。その意味からして「力瘤を入れ・(一人)先走りした」と云う動作の実現が動作のもつ状態の程度が高度においてなされていることを意味している。

「あれ程に・あれ程・あれ程にも」にあつて、その五例中現実の状態の程度が高度であることを意味するものは「あれ程に・あれ程」に各一例みられるにすぎない。

(iv) 「あんなに・あんな・ああ」について

ア、「あんなに」について 二例

•「……。あんなに可愛がつてやり、むかうもよく懐いてゐて、矢張り他人は他人ですわね。……」

(二〇九頁下段一)

右例で「あんなに」は前文の事態を受けて指示する。その事態が「可愛がつてやる」やりようとしてその程度が高度である意味をもつ。従つて「可愛がつてやる」と云う動作の実現が動作のもつ状態の程度が高度なる程度においてなされていることを「あんなに」は意味している。

残る一例は「する」の内容を示すもので程度の意味に関するものではない。

•「ああいふおつちよこちよいでも矢張り気がとがめてゐるもので、あんなにしないではゐられなかつたのだ」

(二二六頁下段九)

イ、「あんな」について 三例

① 形容詞を修飾するもの 一例

•「……。あんないい家、惜しいわ」

(一七三頁上段二〇)

右例で「あんな」は話手が見たその家の事態を受けて指示している。その事態が「いい」ありよりの程度が高度であることから、「いい」の程度が高度であることを意味している。

② 形容動詞を修飾する場合 二例

•「それ見ろ。あんな立派な口をききながら到頭あたまを下げる事になつたらう」

(二四二頁下段二一)

•「阿呆らしい。あんな大きな盟、女御が持つて歩けますかいな。……」

(二六二頁下段九)

右例で「あんな」は各々受けて指示する事態をもち、その事態の程度の高度さにより、「立派な・大きな」

の程度が高度であることを意味している。

ウ、「ああ」について 四例

①形容詞を修飾する場合 ナシ

②形容動詞を修飾する場合 一例

・彼は若し自分が書くとすれば、ああ無反省に惨酷な気持を押し通して行く事は如何に作り物としても出来ないと考へた。 (二二二頁下段一六)

右例で「ああ」は「あのように」と云った意味で用いられていて、受けて指示する事態を前文にもつ。その事態は「無反省に」であることにおいて程度の高度のものである。その程度の高度さよって「無反省に」の程度が高度であることを意味している。

他の三例はいずれも「云ふ」の内容を示すもので程度と無関係のものである。

・ああ云ふ種類

(二二六頁上段一六)

・ああいふ事

(二三三頁上段一四)・(二四七頁上段三)

現実の事態の程度が高度であることを意味するものは「あんな」に三例、「ああ」に一例みられるが、「あんな」にはみられなかった。「かう・これ程に」・「ああ・あれ程に」系はそれらが受けて指示する事態が明確であったが、「それ程に」系は「それ」が受けて指示する事態が臙化し程度の高度そのものを示す語に展じている例が屢みられたことである。

指示副詞よりの転成と言えるものに今一語「さも」がある。「そのようにも」の意味と一応言えるが、「その

ように(さ) が受けて指示するありようであることから「さも」が修飾するありようが「全的に・まさに・全く」に類する意味となり、その意味において修飾するあり様の程度が極めて高度であることを意味するに至っている。次例のような場合である。

● 仔山羊は立つた儘の姿勢で口だけを動かし、さも満足らしく食つてゐる。(一九頁上段四)

● 年寄りでさばけたつもりかも知れないが、失礼だわ」とさも腹立たしさに云つた。(四二頁上段一四)

● それから又小さいチューブを出し、指先きに一寸油をつけて、さも自ら楽しむやうに手鏡を見つめながら、……

修飾される語句が「らしい・さうに・ように」のいずれかを伴うのが特徴である。「らしい・さうに・やうに」と云う様態の程度を「まさに(そのように)」と量る程度副詞と言えよう。同様の語として「丸で」が考えられるが見つけることができなかった。

度外的極度・極度・度外的高度を示す語は以上のように三語・一語・一語とその数が少ない。他の程度を示す語彙よりも圧倒的にその数の多いのは、程度を示すに「高度」であることが最も述べられるからであろう。

「あの花は美しい」の「美しい」は本来それで十分なのである。が、それを「大変に美しい」と言わねば気がすまぬものがヒトには常にある。

使用数の多いものから改めて並べると「大変」三十六例・「非常に」三十二例・「ひどく」二十九例・「随分」二十四例・「とても」二十例・「至極」十例・「はなはだ」七例・「恐しく」一例、指示副詞よりしてのは、「そ

「あれ程に」二十例 「それ程に」十七例・「かう」十五例・「こんなに」七例・「そんなに」七例・「そんな」四例・「あれ程に」四例・「ああ」四例・「こんなにも」二例等となる。

「大変」・「非常に」はほゞヒト・モノ・コトの現実における状態の程度が高度であることを意味するのに用いられている。「ひどく」・「随分」がそれに次ぐ。「とても」は使用例二十例中形容詞・形容動詞を修飾するもの五例、他は打消しの助動詞「ない」と呼応してのそれが八例とこちらでの使用例の方が多い。「とてもかくても」の語源としての意味を捨てきれないからであろう。「至極」・「はなはだ」・「恐しく」は使用例が少ないが、現実の状態の程度を量る用例しかみられない。

指示副詞よりのもので、現実の状態の程度をも示す用例数の多さは、「それ程に」九例・「かう」七例・「それ程」六例・「そんなに」五例・「こんなに」四例・「そんな」三例・「あんな」三例等となり、「そんなにも」・「あれ程にも」・「あんなに」はその用法をもたない。